高　等　学　校

平成２３年度

教育研究員研究報告書

公　　民

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅲ　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅳ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅴ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅵ　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

Ⅶ　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

研究主題	「社会の在り方を考察・提案し、様々な意見を調整することのできる能力の育成」 ～現代社会の諸課題解決への合意形成に向けて～

Ⅰ　研究主題設定の理由

21世紀に生きる私たちは、今後、急速な社会の変化の中で、様々な課題に直面することが予想される。東日本大震災の経験では、これからの地域社会において、自ら学び自ら考え、様々な困難を乗り越えて直面する課題を主体的に解決しようとする「生きる力」をもつ人間の育成が必要であることを、これまでより一層痛感した。そして、それだけではなく、地域社会の望ましい在り方について、自らが課題を探究し獲得した見方や考え方を、地域の他の人々に提示し、様々な意見を調整しながら合意形成を目指しつつ、持続可能な社会に主体的に参画することのできる人間の存在が、ますます重要になると考えた。

今年度の本部会では、今回の学習指導要領の改訂を踏まえ、公民科における思考力・判断力・表現力を明確に定義付けた上で、都立高等学校の公民科の授業の現状を把握することから始めた。その結果、生徒が既習の知識や技能を活用して見いだした課題について多面的・多角的に考察することや、その結果自分が望ましいと考えた課題の解決策や望ましい社会の在り方などをもって他者へ働きかけ、多様な意見の中から合意形成を図る経験を積ませるような授業をなかなか実施できていないことが分かった。そこで、研究主題を「社会の在り方を考察・提案し、様々な意見を調整することのできる能力の育成」と設定した。

また、昨年度の公民部会の研究活動から引き継ぐ課題として、言語活動を充実させる中で、「基礎的・基本的な知識や技能を習得させることと、それらを活用して思考力・判断力・表現力を育成することとを有機的に連関させ、学力向上につなげる授業内容と方法を研究する」ことに取り組むことを確認し、今年度は、「習得」と「活用」のサイクルを授業計画の中に位置付けるための授業の内容と方法を研究することにした。

さらに、新学習指導要領で具体的改善事項として重視している「人間としての在り方生き方についての自覚を一層深める」ための手だてを研究することも重視した。より良い社会を形成するためには、現代社会の諸課題を解決するために、人々が求める個々の幸福の中から、私たちの社会にとって最も望ましい在り方を正義として探究し、少数者に配慮するなど公正な観点から、対立や衝突を回避しながら人々の意見を調整することができる資質や能力を育成し、他者や社会との関わりの中での在り方生き方を自覚させることが大切である。

本部会では、合意形成できる力を「社会の在り方を考察・提案し、様々な意見を調整することのできる力」と定義し、合意形成を目指して考察し、判断し、表現するプロセスを重視した授業実践を研究することとし、言語活動を通じてどれだけ合意形成が図られたかを評価することを通して、思考力・判断力・表現力の育成の実現状況を検証することとした。

Ⅱ　研究の視点

1　公民科における思考力・判断力・表現力の定義

今年度の高等学校各部会の共通テーマは、「思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究」である。そこでまず、公民科としての「思考力・判断力・表現力」の定義を次のとおりとした。

○　思考力

現代の社会的事象に対する関心を高め、主体的に課題を設け、倫理、社会、文化、政治、法、経済、国際社会の諸状況などを踏まえ、多面的、多角的に考察し、課題を探究する力

○　判断力

現代社会の諸課題について、人間としての在り方生き方の自覚の下に、社会の変化や様々な考え方を踏まえ、その望ましい解決の在り方について公正に判断する力

○　表現力

現代社会の諸課題について、探究し考察し判断した過程や結果を適切に表現する力

上記の定義から生徒の現状を見るとき、次のような課題が見いだされる。

○　既習の知識や技能を活用して、合理的・論理的に考えることができない生徒が見られる。

○　多様な意見から合意形成を図るような経験が少ないため、多面的・多角的な思考力・判断力・表現力が身に付いていない生徒が見られる。

さらに、昨年度の教育研究員公民部会の研究活動から引き継ぐ課題として、

○　基礎的・基本的な知識や技能を習得させることと、それらを活用して思考力・判断力・表現力等を育成することを有機的に連関させ、学力向上につなげることが必要である。

2　公民科における合意形成と研究の視点

以上の観点から、公民部会の研究テーマとして、「社会の在り方を考察・提案し、様々な意見を調整することのできる力の育成～現代社会の諸課題解決への合意形成に向けて～」とした。現代社会における様々な課題を解決するのに必要なことは、政治や経済の基礎的・基本的な事項を理解するだけではなく、それらを活用して課題解決に向けて思考を深めていくことと、多様な意見を踏まえて合意形成に向けて判断し、表現することである。そこで、授業実践の中に、既習の知識や概念を活用して現代社会の諸課題解決に向けて自らが考えていくことと、他者との意見を尊重しつつ合意形成に向けて更に考えを深め、表現する場面を設定した。また、ここに示した合意形成とは、多様な意見をとりまとめて一つの結論を導き出すということとともに、合意形成に向けて多様な意見を調整していくことも含まれる。また、多様な意見を調整することは、他者の意見に自己が妥協することではなく、あくまで自己の意見を踏まえて他者の意見の相違を調整し、課題解決に向けて合意形成を図ることである。

よって、本研究では、他者の意見を尊重しつつ、多面的・多角的に現代社会の諸課題を考察し、望ましい解決のための合意形成を目指す姿勢を育成する授業実践について研究した。具体的には、諸課題解決への合意形成を目指して、既習の知識・技能を活用し、合意形成に向けた話合いで意見を調整する全プロセスを通して、適切に考察・判断し、表現する力を育成することを重視した授業の在り方、方法の工夫について、授業の実践事例を提示した。

Ⅲ　研究の仮説

実際の社会では、多様な考えをもつ人々が様々な社会集団の中で、諸課題について互いの利害が調整されるよう何らかの決定を行うなど、合意形成に至る努力が日々繰り返されている。しかし、公民科のこれまでの授業を振り返ってみると、主体的に課題を探究させ、解決に向けて取り組ませる力の育成には取り組んできたものの、他者と共に合意形成を図る態度や様々な意見を調整する力の育成をねらいとすることに乏しかった。このことを踏まえ、今年度の公民部会では、昨年度の研究活動から引き続き課題となっている、基礎的・基本的な知識や技能を習得させることと、それらを活用して思考力・判断力・表現力等を育成することを有機的に関連させ、学力向上につなげる授業内容と方法の研究に取り組むとともに、他者と共に合意形成を目指すプロセスを重視した授業実践を意図的に取り入れることで、習得した知識・技能を活用して課題解決を図る思考力・判断力・表現力の育成を実現することとし、仮説として次の３点を挙げた。

(1)　活用すべき知識や技能を明確にして、考察し判断する場面を設定することで、論理的な考察の方法と多面的・多角的な思考力を育成することができる。

生徒は、学習活動によって習得した概念や知識・理論を、身近な諸課題を考察・判断するときに活用するといった経験が少ない。そのため、活用すべき知識・技能を明確にし、考察し判断する場面を授業の中に効果的に取り入れることで、既習事項を活用する機会を意図的につくり出し、考察の方法を身に付けさせ、課題の解決に向けた思考力を育成することができると考えた。

(2)　社会の望ましい在り方と自己の生き方を関連させて考察させ、現代社会の諸課題の解決に向けた提案を行わせることで、公正で客観的な判断力を育成することができる。

生徒が社会を形成する一員としての自覚をもち、自らの意見を他者に提案しようとするときには、公正かつ客観的な見方や考え方が深まっている必要がある。そこで、現代社会の諸課題の多面的・多角的な考察を進める中で、自己の課題と関わらせ、かつ現役世代の幸福と将来世代の幸福が調和させうる社会の在り方と、その中での自己の生き方を考えさせる授業を行うことで、公民としての公正で客観的な判断力を育成することができると考えた。

(3)　自分が表現したことが他者から適切に受け止められ、評価されるという経験を重ねることで、表現する意欲と力が高まるとともに、様々な意見を調整し合意形成を図る力と態度を育成することができる。

既習事項を活用し諸課題について考察させた後、他者と共に意見を出し合い、合意形成に向けたプロセスを経験する場面を意図的に設定すると、考察し判断した結果を口頭や文章で表現したものが他者によって適切に受け止められ、評価されるという経験を積み重ねることができ、生徒の表現への意欲の向上や、表現力の育成につながると考えた。また、合意形成に向けたプロセスの中で、他者の意見に耳を傾ける経験を重ねることで、様々な意見を調整しようとする意欲や態度の育成も図れると考えた。

このように、合意形成を目指す活動を効果的に授業に取り入れることで、現代社会の諸課題について考察する思考力が高まるだけでなく、新たな提案をするための客観的で公正な判断力が身に付き、更には他者に伝えるための表現力や意見を調整する力が育成できると考えた。

Ⅳ　研究の方法

1　教育実践研究としての位置付け

今年度は、特に思考力・判断力・表現力を育成することを目標に掲げ、その内容や方法について授業実践に有用な学習指導案として提案している。

2　公民科の教育実践研究としての位置付け

「現代社会の諸課題解決への合意形成に向けて」という副題に沿って、公民科の実践研究を次のような方法で進めることとした。

○　各科目において、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、それらを具体的に活用するサイクルを明確にし、諸課題解決に向けた合意形成の過程を重視した提案や話合いを行わせるための授業方法の研究を進める。

(ｱ)　「現代社会」では「幸福・正義・公正」など現代社会を考察するための知識基盤への理解を踏まえ、「持続可能な社会の形成」という観点から、環境を取り上げた学習指導案を作成した。ここでは、経済活動と環境保全のどちらを優先するのかという議論の中で、合意形成に向けて意見の調整を図る態度を育成することとした。

(ｲ)　「倫理」では、「民主社会における人間の在り方」について、実際の社会問題について考察することを通して、関連する先哲の思想について理解を深めさせる学習指導案を作成した。具体的には、衰退する商店街をどのように活性化させるかについて、社会契約説の理念を念頭に置いて、ホッブズやロックなどの先人ならどのように助言するかを想定し発表させる。その上で、どのような合意形成が可能なのかを探る授業展開とした。

(ｳ)　「政治・経済」では、国内政治と国際政治の両分野について、二つの学習指導案を作成した。国内政治については、昨年に引き続き新学習指導要領で法教育が重視されていることを受け、法の意義や役割について、裁判員の立場から考察させる授業展開とした。国際政治については、「人種・民族問題、地域紛争」について平和的な共生・共存を目指しながら、対立する各々の立場を演じるロール・プレイングの手法で、考察し発表させる授業展開とした。これらの学習指導案では、合意形成に向けた利害関係者や当事者の立場を仮想体験させる授業の方法を用いた。

○　研究主題の検証は、習得した知識を活用して多面的・多角的に考察し表現しているか、社会参画の意識をもって、持続可能な社会の実現等の課題を踏まえた合意形成を目指しているか等について、ワークシート、自己・他者評価、レポート、発表、話合い等から評価することを通じて行う。また、自ら考察した結果を提案し、他者の意見を受けて、生徒の意見が変わっていく様子を評価するとともに、その手だてについても研究することとする。そして、評価結果から思考力・判断力・表現力の育成がどの程度図られたかを検証する。

3　研究の方法としての特質

公民科の指導目標である「現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う」を踏まえ、本研究では思考力・判断力・表現力の育成を目指す授業実践にとどまらず、多様な意見を調整し、合意形成を図る態度を育成することに主眼を置いた。議論だけで終わりではなく、生徒が新たな視点を生み出せるような授業の展開を提案し、公民科の教員が教材研究に生かせるものとした。

Ⅴ　研究の内容

1　研究構想

全体テーマ　**新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ　**思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究**

教科等における「思考力・判断力・表現力」の定義

思考力　現代の社会的事象に対する関心を高め、主体的に課題を設け、倫理、社会、文化、政治、法、経済、国際社会の諸状況などを踏まえ、多面的・多角的に考察しつつ課題を探究する力

判断力　現代社会の諸課題について、人間としての在り方生き方の自覚の下に、社会の変化や様々な考え方を踏まえ、その望ましい解決の在り方について公正に判断する力

表現力　現代社会の諸課題について、探究し考察し判断した過程や結果を適切に表現する力

各教科における「思考力・判断力・表現力」の育成の現状と課題

現状　既習の知識や技能を活用して合理的・論理的に考えることや、多様な意見から合意形成を図る経験が少ないために、多面的・多角的な思考力・判断力・表現力が身に付いていない。

課題　基礎的・基本的な知識や技能を習得させることと、それらを活用して思考力・判断力・表現力等を育成することとを有機的に連関させ、学力向上につなげる授業内容と方法をどのようにしていくかが課題である。

公民部会主題

社会の在り方を考察・提案し、様々な意見を調整することのできる力の育成
～現代社会の諸課題解決への合意形成に向けて～

仮　説

○　活用すべき知識や技能を明確にして考察し判断する場面を設定することで、論理的な考察の方法と多面的・多角的な思考力を育成することができる。

○　社会の望ましい在り方と自己の生き方を連関させて考察させ、現代社会の諸課題解決に向けた提案を行わせることで、公正で客観的な判断力を育成することができる。

○　表現したことが適切に受け止められ、評価されるという経験を重ねることで、表現する意欲と力が高まるとともに、様々な意見を調整し合意形成を図る力と態度を育成することができる。

具体的方策

知識・技能の習得と活用のサイクル及び思考・判断・表現する場面を指導計画の中に明確に位置付ける。諸課題解決に向けた合意形成の過程を重視した討論活動や提案を行わせる。

検証方法

習得した知識や技能を活用して多面的・多角的に考察し表現しているか、また、社会参画の意識や持続可能な社会の実現等の課題を踏まえた合意形成を目指しているかを、ワークシート、自己・他者評価、レポート、発表、話合い等から評価する。その評価結果から思考力・判断力・表現力の育成がどの程度図られたかを検証する。

2　実践事例Ⅰ

科目名	現代社会	学年	第１学年

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　（３）共に生きる社会を目指して

イ　使用教材　「高校生の新現代社会」（帝国書院）

(2)　単元（題材）の指導目標

・　大項目（１）及び（２）における既習事項を活用して環境問題を探究し、持続可能な社会の形成に参画する態度を育成する。

・　現役世代の幸福と将来世代の幸福の調和をどのように図ればよいのかを考察させ判断させることを通して、思考力・判断力・表現力を身に付けさせる。

・　資料の活用及び言語活動を通して、幸福・正義・公正など社会の在り方を主体的に考察するための知識基盤を理解させる。

(3)　評価規準

	ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
単元の評価規準	様々な環境問題について関心を高め、意欲的に課題を探究し、平和で民主的なより良い社会の実現に向けて参加・協力する態度を身に付け、人間としての在り方生き方についての自覚を深めようとしている。	現代の環境に関わる諸課題について、現代の世代の幸福と将来世代の幸福の調和をどう図るかなどの観点から多面的・多角的に考察し、判断した過程や結果を適切に表現している。	現代の環境に関わる諸課題について諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択し、分析して効果的に活用している。	現代の環境に関わる諸課題とこれまでの環境に関わる政治・経済体制について理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導計画（２時間扱い）

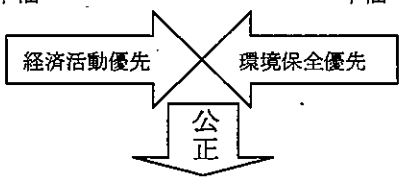
時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	・各国の環境に対する取組	・様々な国々の環境への取組について歴史・文化・法律・経済・生活などの面から諸資料を活用して調べ、班ごとにまとめ、発表する。	ウ・エ ・現代の環境に関わる諸課題について諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択し、分析して効果的に活用している。 ＜発表＞＜観察＞ ・現代の環境に関わる諸課題とこれまでの環境に関わる政治・経済体制について理解し、その知識を身に付けている。 ＜ワークシート＞
2（本時）	・将来世代の幸福の我が国の環境政策の方向性	・前時で発表した様々な国々の環境への取組を踏まえ、経済発展の立場と環境保全の立場を対照させながら、持続可能な社会を形成するための方策を考察させ、ＨＲとしての提言として発表する。	ア・イ ・現代の環境に関わる諸課題について、多面的・多角的に考察し、判断した過程や結果を適切に表現している。 ＜観察＞ ・様々な環境問題について関心が高まっている。 ＜ワークシート＞

(5)　本時（全２時間中の２時間目）

ア　本時の目標

環境に関わる諸外国の取組を踏まえ、経済発展の立場と環境保全の立場を対照させながら、我が国が両者を調和させて将来世代のために持続可能な社会を形成するための方策を考察させ、ＨＲとしての提言を発表させる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	5分	・前時で行った諸外国の環境に対する取組を再度確認する。	・前時のワークシートから、各国の環境に対する取組の違いを確認させる。	ア 諸外国の取組に関心が高まっている。 <観察>
展開	20分	**『環境保全ｖｓ経済発展 将来世代の幸福に向けて日本が進むべき道は？～諸外国の取組から考える～』** ・各国の取組を参考に、日本は将来世代のために、環境についてどのような取組を行うべきかを、各グループで考察し、発表する。 <予想される発表内容> 1　オランダの取組を参考にした例 理由：「オランダは政府と企業が情報交換をしながら協定を結び、企業が自主的に環境対策を行っていて成功してきている。日本も同じ形をとるべきだ。」 2　ドイツの取組を参考にした例 理由：「循環型社会の基盤をつくり上げ、幼稚園段階から環境保全を重視した環境教育を行っている。家庭におけるごみの減量化や、グリーンコンシューマーの考え方も定着しており、国民の環境に対する意識が高い。将来世代のためには環境保全が大事である。そのためには政府だけでなく、国民の環境に対する意識を育て高めることが必要だと思う。」 3　スウェーデンの取組を参考にした例 理由：「市民の環境に対する意識が高く行政が行う環境政策も、市民の要望を踏まえた規制となっているため効果が高い。エネルギー政策に関しても、環境の持続可能性を考えた政策を行っている。」 4　アメリカ合衆国の取組を参考にした例 理由：「国民の幸福のためには必ず経済発展が必要なのだから、アメリカ合衆国のように先進的な科学技術の研究成果を生かして、環境保全と経済発展を両立しうる政策を貫くべきだ。」	・５、６名でグループをつくり、前時で学習した諸外国の取組を参考に、環境保全を目指す立場と、経済発展を目指す立場を対照させながら、幸福・正義・公正などを活用して考察するよう助言する。 ・グループ討議での司会者と発表者を決めておくように指示する。 ・将来世代については、自分たちの子供や孫のことを具体的に想定するよう助言する。 ・前時で調べた内容から、各国の取組では国民の幸福をどう考え、世代間の調和を図るために必要な公正さをどう考えているのかに着目させる。 ・将来世代の幸福に配慮して社会の在り方を考察し、そのために我が国が環境についてどのような取組を目指すのかを判断していくことが重要であることに触れる。 ・経済活動を優先する立場と環境保全を優先する立場を対照させながら考察する過程で、環境や資源が有限なものであるということを気付かせ考え方が偏らないように留意する。 ある国家の幸福　対立　ある国家の幸福  解決策を考える⇒「正義について考える」 ・各グループ内で話合いが活発に行われているかどうかに留意し、特定の生徒の立場や意見だけでグループの意見を決めてしまわないよう配慮する。 ・各グループから出た意見と、それに対する感想を随時ワークシートに記入するよう助言する。	イ 各国の取組を比較し、我が国が参考にすべき点について多面的・多角的に考察している。 <観察> イ 幸福・正義・公正などの観点を活用して環境問題解決の望ましい在り方を考察し、公正に判断している。 <観察> <ワークシート> ア、イ 話合いに積極的に参加し、自分の意見を述べ、他者の意見をよく聞いた上で、グループの意見として調整している。 <観察> <発表>

		5　中国の取組を参考にした例 理由：「日本だけが地球環境保全の責任を負う必要はなく、中国のように大規模な開発を行う中で、国内の環境保全だけに意を用い、環境対策は欧米に任せて後回しでよい。」 6　マレーシアの取組を参考にした例 理由：「現在及び将来の世代の安全な生活環境の獲得を目指し、持続可能な生活スタイル、消費・生産方式を取り入れた政策を参考にすべきである。」	・発表に際して、次の２点を必ず踏まえさせるよう留意する。 ①　どこの国を参考にすべきか ②　参考にする理由 ・参考にする理由については、日本にとって利点は何なのかということと、参考にする理由について、グループでどのような意見が出たのかについても説明させるようにする。	イ 他のグループから出た意見を踏まえ、自分たちの意見についてより多角的に考察し直している。 <観察>
	20分	**『自分たちの世代及び自分たちの子・孫の世代が持続可能な社会を形成するための○年○組からの提言』** 各グループの発表内容から、日本が将来に向かってどのような取組を行えば、現役世代の幸福と将来世代の幸福のために、持続可能な社会が形成されるのかを考察し、結論をＨＲの提言として発表する。	・各グループの発表内容を踏まえ、自分たちのグループの意見に参考になるものはないかを検討させ、持続可能な社会を形成するために、我が国がどのような方向に進むべきかをグループごとに考察させ、今後の我が国が進む方向性について、ＨＲの提言となるようにする。. ・環境保全の立場と経済発展の立場を調和させることが大切であることに留意させる。 ・自分の考えをワークシートに記入させる。 予想される提言 マレーシアの取組を参考に、現在から将来世代へと続く持続可能な社会形成に向けて、効率的な消費生活様式の導入へと国民の意識を高めるとともに、アメリカ合衆国の取組を参考に、先進技術を導入し環境に配慮した生産方式の導入が必要である。	イ 他のグループの意見を踏まえ、再度自分の考えをまとめ直している。 イ 自分の考えを既習事項を踏まえ、自分の言葉で表現している。 <観察> <発表> <ワークシート>
まとめ	5分	ＨＲとして出した結論と本時の授業のまとめについて、ワークシートに記入する。	・他者の意見を聞き、自分の考えが変わったのか、それとも変わらなかったのかをワークシートに記入させながら、その理由を考えさせるようにする。	ア 自分の考えとＨＲとしての提言の違いを踏まえ、更に環境問題について考えようとしている。 <ワークシート>

(6)　本時の振り返り

ア　地球環境問題を「現代に生きる私たちの課題」と捉え、環境保全か経済発展かの立場から世界各国の環境に対する具体的な取組を踏まえて自分の意見をまとめるとともに、他者と意見交換する場面が見られた。

イ　グループで合意形成を図るために、自分の考えや立場に捉われることなく、課題解決に向けて広い視野から考察し、様々な意見を調整していこうとする態度を身に付けさせることができた。

ウ　グループでの合意形成過程における個々の生徒の努力をどのような観点から評価していくかについての工夫が足りなかった。教員から生徒に対しての新たな問題提起等の工夫も足りなかった。

現代社会ワークシート

「将来世代の幸福に向けて～我が国の環境政策の方向性～」～高校生からの提言～

１学年＿＿＿組　＿＿＿番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿グループのメンバー＿＿＿＿＿＿＿＿

１　「環境保全ＶＳ経済発展、将来世代の幸福に向けて日本が進むべき道は？」

参考にする国　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

日本は経済発展を目指すべきか、環境保全を目指すべきか。そのためにはどこの国の取組を参考にすべきなのか、その理由を含めて自分の考えを書きなさい。
※①　将来世代が幸福に生活できるために　②　日本の将来のためにはどのような取組を行うことが正しいのか　③　考えられる少数意見に配慮しながら以上３点を踏まえて考えよう。
他のメンバーの意見
グループとして選んだ国を参考にする理由は？

他のグループの発表を聞いての感想

班	参考にする国	
発表内容		
発表を聞いての感想		

２　自分たちの世代と子供・孫世代が持続可能な社会を形成するために

〇年〇組からの提言

各グループの発表を参考にして、自分たちの世代とともに子供・孫世代まで持続可能な社会を形成するために日本はどのような取組をすればよいのか考えよう。

自分の考えとその理由

他の人たちの考え

他の人の意見を聞いて、感じたこと
他の人の意見を聞いて上での、自分の考え

３　提　言

＿＿＿高校＿＿年＿＿組は自分たちの世代とともに子供・孫世代まで持続可能な社会を形成するために

日本は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿をここに提言します。

3　実践事例Ⅱ

科目名	倫理	学年	第３、４学年

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　（３）現代と倫理　　ア　現代に生きる人間の倫理

イ　『高等学校　現代倫理　改訂版』（清水書院）　『最新図説倫理』（浜島書店）

(2)　単元（題材）の指導目標

・　民主社会における個人と社会との関係について諸事例を考察させ、民主社会における人間の在り方に関する先哲の思想を理解させる。

・　民主社会における人間の在り方を他者と共に生きる自己の課題として捉え、客観的に考えることのできる能力を身に付けさせる。

(3)　評価規準

	ア　関心･意欲･態度	イ　思考･判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識･理解
単元の評価規準	民主社会における人間の在り方について関心を高め、倫理的な観点から意欲的に探究し、民主社会における自他の価値観の尊重について主体的に学習しようとしている。	民主社会における人間の在り方について課題を見いだし、個人と社会の関係を踏まえるなど多面的･多角的に考察し、公正に判断した過程や結果を、適切に表現している。	民主社会における人間の在り方について、先哲の思想など様々な資料を収集し、有用な情報を選択し自分の考えをまとめ発表する上で、効果的に活用している。	民主社会における人間の在り方について、自己の生き方を理解し、自己の人格形成に生かす知識として身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導計画（２時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	・民主社会についての先哲の思想	・民主社会における人間の在り方について、ホッブズ・ロック・ルソーなどの社会契約説などについてそれぞれの思想がもつ考え方の違いを理解する。	ウ、エ ・先哲の思想など様々な資料を収集し、有用な情報を選択し効果的に活用している。 ＜ワークシート＞ ・民主社会における人間の在り方について理解し、その知識を身に付けている。 ＜ワークシート＞
2（本時）	・民主社会における個人と社会との関わり	・民主社会における個人と社会の関わりに関する事例について、社会参画の観点から社会契約説を活用し、他者と共に生きる自己の課題として考える。	ア、イ、エ ・民主社会における人間の在り方について、倫理的な観点から意欲的に探究している。 ＜観察＞ ・民主社会における人間の在り方について多面的・多角的に考察し、公正に判断している。＜観察＞ ・民主社会における人間の在り方を理解し、自己の人格形成に生かす知識として身に付けている。 ＜ワークシート＞

(5)　本時（全２時間中の２時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　民主社会における個人と社会との関係についての事例を用いて、他者と共に生きる自己の課題を見いだし、社会契約説を活用して、人間と社会の関係の望ましい在り方という観点から考察することによって、人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。

(ｲ) 学んだ知識を活用して自ら考え、考えた内容をまとめて文章化し発表できるようにする。

(ｳ) 自分の考えを発表したり、他者の意見を聞いたりするなどの言語活動を通じて、客観的で公正な判断を行わせる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	8分	**「誰もが納得する物事の決め方とは何だろう」** ・文化祭企画の決め方のメリット、デメリットの理解を通して社会契約説を確認する。 <決め方の例> **ア　担任が生徒から決定権を任されて一切を決める。（ホッブズ）** **イ　担任と生徒代表である文化祭委員とで決める。（ロック）** **ウ　生徒全員の話合いで決める。（ルソー）** ・自分の考えたメリット、デメリットを簡単に発表する。 ・決め方の例について、社会契約説の考え方が今も活用できることを確認する。	(発問) 文化祭企画の三つの決め方について、そのメリットデメリットを考え、ワークシートに書こう。 ・ワークシート記入の際に、メリット、デメリットのどちらにも偏らないよう助言する。 ・物事を決定する考え方が先哲の思想と密接に関係していることに気付かせるようにする。	エ ホッブズ、ロック、ルソーら先哲の思想の違いを理解している。 <ワークシート>
展開1	12分	**「商店街の活性化アドバイスを考えよう」** ・衰退している商店街を事例に、各グループ（３人の先哲ごとにグループを分担）の考え方を踏まえた活性化のための方策を話し合う。 <方策の例> **ア　資本力をもつチェーン店が商店街の土地を買収し、各商店をテナントとしてチェーン店に参加させることで活性化できる。（ホッブズ）** **イ　商店主、行政、住民など様々な立場の代表者が集まった商店街活性化委員会をつくり、それぞれが資金やアイディアを提供することで活性化できる。（ロック）** **ウ　商店主同士がそれぞれアイディアや資金を出し合って共同経営的な機能を強化し、商店街をリニューアルすることで活性化できる。（ルソー）** ・それぞれの先哲の思想を踏まえた方策をグループごとに発表する。	(発問) 商店街活性化の方策を決めるときに、社会契約説を使うとどのようなアドバイスができるか、グループで話し合って、考えよう。 ・社会契約説の３人の先哲が主張した人間観を踏まえ、ワークシートにあるキーワードを活用して、話合いをさせる。 ・人の意見との共通点や違いを基に自分の意見を述べること、理由を明確にすることを助言する。 ・発表の際には、他グループの意見をよく聞き、ワークシートにメモをすることを通して、他者との意見の違いをよく考えさせるようにする。	イ 先哲の思想を活用し、話合いにおいて自分の意見を表現している。 <観察> <ワークシート> イ 話合いに主体的に参加し他の生徒の意見を踏まえて商店街の在り方を公正に判断している。 <観察> イ 先哲の思想を活用し、自ワークシートに自分の意見をまとめている。 <観察>

展開2	20分	**「商店街活性化の方策をそれぞれの立場で考えよう」** ・各グループが立脚する先哲を替え異なる立場から活性化の方向性を考える話合いを行う。 ＜立場の例＞ **大型チェーン店経営者、行政の担当者、商店街代表、町内会代表** ・様々な立場を踏まえた活性化の方策を、グループごとに発表する。 ・発表終了後、それぞれの立場からの方策を踏まえ、最終的に多数の賛成が得られるような商店街活性化の方策を考え、話し合う。 ・活性化の方策をグループごとに発表し、その内容をワークシートに記入する。	(発問)では、商店街を活性化する方策について、先程考えたときとは別の立場で別の先哲の思想を活用するとどうなるか、再度グループごとに考えてみよう。 ・各グループを様々な立場に位置付け、決められた立場から活性化に向けた意見をまとめさせるようにする。 (発問) 最後に、様々な立場やその根拠となる社会契約説を生かして、多数の賛成が得られるような方策を全員で考えよう。 ・立場の違いを意識しながら、多数の合意が得られるようなアドバイスを考えさせるよう、ヒントやキーワードの提示などに留意する。	イ 話合いに主体的に参加し他の生徒の意見を踏まえて商店街の在り方を公正に判断している。 ＜観察＞ イ 各グループの方策を踏まえ、商店街活性化についての自分の方策をまとめている。 ＜観察＞ イ 話合いに主体的に参加し他の生徒の意見を踏まえて商店街の在り方を公正に判断している。 ＜観察＞
まとめ	5分	・各グループによる商店街活性化の方策や自分の考えた活性化策を記入するなど、ワークシートを完成する。	・先哲の思想を生かして、社会形成に参画する意識を育むことで、合意形成を目指す態度の重要性を理解させる。	ア 民主社会にあっては自他の意見を尊重しつつ合意形成を図ることが重要であることに気付き、社会のより良い在り方を考えようとしている。 ＜ワークシート＞

(6) 本時の振り返り

ア 社会契約説を用いた先哲の思想という基礎的・基本的な知識を活用して、社会の課題に対して、自ら思考する場面がグループごとの話合いの中で見られた。また、ワークシートの記述ややグループごとの話合いの様子から、基礎的・基本的な知識を理解したことで、合意形成に向けての共通基盤をつくり出すことができ、授業に積極的に参加しようとする場面が見られた。

イ 各グループの発表の内容やワークシートの記述から、合意形成に向けての知識の共通基盤をつくり出すことにより、グループ学習の場面において、社会の課題に対して、自らの意見を共通基盤に照らして積極的に提示しつつ、様々な意見を調整し、合意形成を図ろうとする態度を育むことができた。

ウ 合意形成に向けて、生徒が様々な意見を調整する過程で、合意形成に果たした力をどのように評価するか、どの場面でどの方法を用いることが客観的で、適正な評価であるのか、についての確認の手だてが、話合いの様子の観察やワークシートの記述だけでは十分でなかった。

倫理ワークシート

「先哲の考えを今に生かし、社会の在り方を考えるにはどうすればよいか」

1　社会に関わること・・・・物事をどう決めていくのか？

テーマ「文化祭の企画を決める時の三つの方法で、それぞれのメリット、デメリットを考え、記入しよう」

	担任が生徒から任されて決める	担任と文化祭委員とで決める	クラス全員で決める
メリット			
デメリット			

ポイント

2　社会に関わること…先哲の思想を生かして、商店街を元気にしよう！

10丁目商店街は60年前にでき、地元に人気の商店街であった。ところが、ここ数年の不景気などによって店の移転や閉店が増え、「シャッター商店街」というありがたくないニックネームまで付いてしまった。ある日、商店街の会長さんから、「10丁目商店街を元気にするアイディア募集」という申し出があり、アドバイスを考えることになった。

1）先哲の考え（社会契約説）を使って、商店街にアドバイスをしてみよう。

…各グループで活用する先哲の考え方を使うと、どういうアドバイスになるか？

ホッブズの社会契約説	人間は自由で平等だが、欲望に支配されている状態だから、強い王様に全てを委ねて、王様に守ってもらう国を作ればいい。
ロックの社会契約説	人間は自由で平等だが、そのままでは不安定なので、国民の代表者を選んでその代表者に守ってもらう国を作ればいい。
ルソーの社会契約説	人間は自由で平等だが、現実は不平等だ。公共の利益を目指すために、全ての人民が参加する人民共同体に守ってもらう国を作ればいい。

あなたたちのグループ（ホッブズ・ロック・ルソー）として、アドバイスをすると

そう思った根拠（理由）は何ですか？

他のグループのアドバイスもメモしよう。

（ホッブズ・ロック・ルソー）	（ホッブズ・ロック・ルソー）

ポイント

2　立場を変えてアドバイスをしてみよう。

ショッピングセンター社長	住民の生活を豊かにするため、大量・安価販売することが地域に役立つことなので、ショッピングセンターに参加をしてほしい。
行政の担当者	様々な立場の意見を聞いて、それにフィットした行動をとるのが私たちの役割であり、調整をしっかりと果たしていきたい。
商店街会長	住民で商売に役立っている。私たちの伝統を守るために、今の形をしっかりと維持することで、地域の利益につなげたい。
町内会会長	消費者の立場で、若者から高齢者まで要望がたくさんきている。 安価で便利なショッピングセンターも、仲のよい商店街も両立してほしい。

あなたたちのグループ（　　）として、アドバイスをすると

そう思った根拠（理由）は何ですか？

他のグループのアドバイスもメモしよう

3　先哲の思想や立場を踏まえて、多数の賛成が得られるようなアドバイスを考えよう！！

多数の賛成が得られるようなアドバイスをすると

そう思った根拠（理由）は何ですか？

4　実践事例Ⅲ

科目名	政治・経済	学年	第３学年

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　（１）現代の政治　ア　民主政治の基本原理と日本国憲法　　法の意義と機能

イ　「政治・経済」（実教出版）　「2011　資料　政治・経済」（清水書院）

(2)　単元（題材）の指導目標

- 法の意義と機能に関する基本的な見方や考え方を身に付けさせる。
- 民主的な社会生活を営むためには、法に基づく政治が大切であることを理解させる。
- 国民が司法に参加する裁判員制度における合意形成の課題について考察させる。

(3)　評価規準

	ア 関心･意欲･態度	イ 思考･判断･表現	ウ 資料活用の技能	エ 知識･理解
単元の評価規準	法の意義や司法制度に対する関心を高め、課題を意欲的に探究し、法による望ましい社会の在り方を客観的に考えようとしている。	法の意義や司法制度に関する諸課題について多面的・多角的に考察し、社会の変化や様々な考え方を踏まえ公正に判断した過程や結果を適切に表現している。	法の意義や司法制度に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、自分の意見の発表や合意形成に向けての話合いなどに効果的に活用している。	法の意義や司法制度に関する基本的な概念や理論を理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導計画（３時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	・司法権と裁判所	・司法権や裁判所の機能、少年法について理解する。	ア、エ 法の意義や司法に対する関心を高め、司法権や裁判所の機能、少年法について理解し、知識を身に付けている。 ＜ワークシート＞＜観察＞
2	・司法制度改革	・近年の司法制度改革について理解し、諸課題を多面的・多角的に考察する。	イ 司法制度に関する課題を見いだし、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえて、公正に判断している。 ＜ワークシート＞＜観察＞
3（本時）	・法の意義	・他国の法や刑罰に関する資料を活用し、法の意義について考察する。 ・判例を基に裁判員裁判を疑似体験する中で、合意形成に向けた話合いを行い、公正な判断力を身に付ける。	イ、ウ 資料を効果的に活用しながら、他者と共に合意形成に向けた意見調整を行い、法の意義について考察している。 ＜発表＞＜観察＞＜ワークシート＞

(5)　本時（全３時間中の３時間目）

ア　本時の目標

(ア)　他国の法や刑罰に関する資料を活用して、法の意義や刑罰の意義を理解させる。

(イ)　国民が司法に参加する裁判員制度における合意形成の課題について考察させる。

(ｳ) グループでの話合いや発表を通じて多様な意見を調整する力を身に付けさせ、公正で客観的な判断力や、合意形成に向けて意見を調整しようとする意欲・態度を育成する。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	●二つの法や刑罰に関する新聞記事『加害者の目に硫酸をかける刑、被害者の訴えで中止　イラン』と『「憎しみの連鎖断って」　嘆願実らず　9.11 報復事件　死刑執行』を比較し、法や刑罰の在り方について多様な事例があることを理解する。 ＜発問１＞「記事を読んでどのように思いましたか？」 ◎予想される生徒の答え ［イラン］「キサース刑という報復刑があるのには驚いた。」「目には目を、でよいと思う。」 「被害者女性の許すという行為に感動した。」 ［アメリカ］「いくら報復とはいえ、中東と関係のない人々を無差別に死傷させたのだから、死刑で当然だろう。」 「被害者のブイヤンさん自らが嘆願しているのだから死刑執行を停止すべきだ。」 「憎しみの連鎖を断ち切ることは重要だが、殺された遺族の気持ちを考えると、死刑もやむを得ないのではないか。」	・世界には多様な法や刑罰があることを強調する。 ・他者の意見を聞き、考え方の違いを受け入れるよう促す。	イ、ウ 資料を活用して法の意義に関する自分の考えをまとめている。 ＜ワークシート＞
展開1	5分	●法の意義を考える ＜発問２＞「様々な出来事、法の在り方があるが、そもそもの法の意義は何だろう？」 ◎予想される答え 「対立を解決するため」「安全で自由に暮らすため」 ＜発問３＞「法が守られない場合はどうなるのか？」 ◎予想される答え 「犯罪の横行を招く」「私的なトラブルが続発する」	・なぜ仇(あだ)討ちは許されないのかにも触れながら生徒の意見を喚起する。	イ 社会規範の一つとしての法が紛争の防止や利害対立の調整や解決に果たしている役割などを理解し、法の意義について理解を深めている。 ＜観察＞ ＜ワークシート＞
		●裁判員制度の意義を考える ＜発問＞「司法になぜ裁判員制度が導入されたのか。その意義は？」 ◎予想される答え 「国民の声を司法に反映させるため」 「司法に対する国民の理解と信頼をより深めるため」 「裁判員を経験することで、自らを取り巻く地域社会の問題についても考え、問題を共有する意識をつくり上げることにつながる」		イ 私たちの財産や身体の自由を奪うことにもなり得る司法に国民の声を反映させることで、国民の理解と信頼が深まることを理解している。 ＜観察＞ ＜ワークシート＞

展開2	10分	●グループワーク 「もしもあなたが裁判員になったら」 ＜判例：2010年２月10日宮城県石巻市の男女３人殺傷事件＞を用いて、裁判員裁判の疑似体験をする。 ・事件の概要を理解する。	・裁判員制度の人数と似通わせるため６人（又は７人）グループを作る。 ・円卓の状態に近付くように、机の配置を工夫させる。 ・判決が分からない状態で、事件の概要をつかませる。 ・判決について、「懲役３年執行猶予５年」「懲役５～10年の不定期刑」「懲役18年「懲役25年」「無期懲役」「死刑」の選択肢を提示し、その中から選ばせる。 ・これまで裁判員制度で審理された少年の殺人事件の判例を提示し参考にさせる。	イ 資料の中から有用な情報を適切に選択し、自分の意見の発表に向け効果的に活用している。 ＜観察＞
展開3	10分	・12枚中、６枚の焦点カード（17ページ参照）を活用して１回目の評議・評決を行う。	・意見の偏りが起きないように、焦点をカードにして配布・提示する。 ・12枚の焦点カードのうち６枚だけを開かせた状態で、１回目の評議・評決を行う。 ・すでに学習している少年法の理念を思い出させる。	イ 多様な意見を踏まえ多面的・多角的に考察し、適切な評決について公正に判断している。 ＜観察＞ ＜ワークシート＞
	5分	・残りの焦点カードと追加のカードを活用して２回目の評議・評決を行う。	・１回目の評議で評決が懲役刑になったグループには、被告に不利になるカードを、死刑になったグループには、被告に有利になるカードを追加する。 ・模造紙に量刑と理由を書かせる。	
展開4	10分	●グループの判決を発表する。 ◎予想されるグループの答え 「判決は有罪・無期懲役。二人を殺害したが、被告はまだ18歳の少年であり、更生の可能性が残っていることを考えると、極刑ではなく服役させ、一生をかけて罪をつぐなわせるべき」 「判決は有罪・死刑。被告は犯行当時18歳７か月と少年法適応の年齢ではあったが、何の落ち度もない２人を身勝手な理由で残虐に殺害したことへの情状酌量の理由とはならない。」 ・実際の判決を確認する。	・その判決に至った話合いの経緯も一緒に発表させる。 ・裁判員裁判で少年に死刑判決が出たのは初めてであることや、死刑の判決を下すときは全員一致の場合に限るようにするなどの議論があることを知らせる。	イ 根拠を明確にしてグループの考えを分かりやすくまとめている。 ＜発表＞
まとめ	5分	●授業における自己評価、裁判員裁判の疑似体験の感想や裁判員制度参加に対する意識の変化を振り返らせる。	・前時の授業で確認した自らの裁判員制度参加に対する意見と、グループ活動を経てからの自らの意見の変化を確認させる。	イ 学習のまとめを適切に表現している。 ＜観察＞ ＜ワークシート＞

(6) 本時の振り返り

ア　ワークシートに記入された自己評価から、他国の法や刑罰の資料を活用し、法や刑罰の意義について、自らの立場や考え方に固執せず、広い視野で物事を見ることができるようになったことが分かった。

イ　グループでの話合いの様子から、多様な意見を調整する力や、公正で客観的な判断力、合意形成に向かう意欲・態度を育成することができたことが分かる。

ウ　グループの意見をまとめ、討論・発表をしていくことで、明確な根拠から自分の意見を導き出し、積極的に社会に参画していくことの大切さに気付くようになったことが、ワークシートの自己評価の記述から分かった。

エ　合意形成のための考察、提案、調整の過程をどのような観点で評価するのか、合意形成への努力を続けたかどうかの評価をどのように行うかなど、授業者が客観的に確認する手だてについての工夫が十分でなかった。

○資料１　＜焦点カードの内容＞

① 少年の健全育成を理念とする少年法や国際条約では、18歳未満に死刑を科すことを禁じている。	② 被告には、不安定な家庭環境や、母親から暴力を受けるなどした生い立ちがあった。	③ 被告は被害者遺族らに手紙を送ったのは１回だけで、被害者の精神的苦痛を和らげているとは言えない。	④ 少年による二人殺害は、「境界事例」として過去に地裁と高裁で死刑か懲役刑かで判断が分かれた判例がある。
⑤ 成長の途中段階にある少年は、教育や環境によって大きく変わる可能性がある。	⑥ 犯行当時、少年の年齢は１８歳７か月であった。	⑦ 被告は実母への傷害事件で保護観察中だった。	⑧ 被告は元交際相手を連れ戻すため、邪魔する者を排除しようとして二人を殺害し、１人に重傷を負わせた。
⑨ 検察側は、被告の少年に対して死刑を求刑している。	⑩ 年齢やこれまでの判例を踏まえれば、少年には懲役刑が選択されるのではないかとみる専門家は多い。	⑪ 少年は各被害者がいずれも無抵抗であったにもかかわらず、ためらうことなく殺傷行為に次々と及んでいる。	⑫ 第３回公判で、次女は「少年が生きているだけで怖い。極刑を望みます。」と述べた。

○資料２　＜追加する焦点カードの内容＞

・死刑を選んでいる班	・懲役刑を選んでいる班
◎ 少年犯罪では、更生の可能性の判断が、成人の犯罪より重要視される。	◎ 被告は被害者が別れを切り出すたびに、ダンベルで殴ったり、首を絞めたり、たばこの火を押しつけたりしていた。

政治・経済ワークシート

裁判員になったとき、あなたの法の意義についての考え方はどう変わる

Q１：法や刑罰に関する二つの記事について意見を書こう。

『加害者の目に硫酸をかける刑、被害者の訴えで中止　イラン』について	『「憎しみの連鎖断って」願い実らず　9.11 報復事件　死刑執行』について

Q２：法の意義・裁判員制度導入の意義を考えよう。

法の意義は何だろう？	裁判員制度が導入されたのはなぜ？
自分の考え：	自分の考え：
みんなの考え：	みんなの考え：

＜グループワーク＞　「もしもあなたが裁判員になったら」

20 歳になったら選ばれるかも知れない裁判員・・・。

でも一人でやるわけではない。仲間と共に評議を重ね、判決を考えよう。

○判例：2010 年2月 10 日　宮城県石巻市男女三人殺傷事件

【判決は次の中から選ぶこと】

＜・懲役３年執行猶予5年　・懲役5～１０年の不定期刑　・無期懲役　・死刑　＞

評議 １回目	グループ討議メモ	判決：＿＿＿＿＿＿＿＿ 理由：
評議 ２回目	グループ討議メモ	判決：＿＿＿＿＿＿＿＿ 理由：

～　今回の取組について、自己評価をしてみよう　～

評価の観点	＜　←　できた　できなかった　→　＞
新たな見方・考え方を身に付けることができたか。	＜　4　3　2　1　＞
公正で客観的な判断ができたか。	＜　4　3　2　1　＞
自分の意見を明確に述べることができたか。	＜　4　3　2　1　＞
他のメンバーと合意形成を目指すことができたか。	＜　4　3　2　1　＞
他のメンバーとのグループ討議(評議)を体験して気付いたこと	
評議を行う上で気を付けなければならないと思ったこと	
授業を通して自分の考えが変わったところ ⇨	

３学年＿＿＿組＿＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5　実践事例Ⅳ

科目名	政治・経済	学年	第６学年（高校第３学年）

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　（３）現代社会の諸課題　イ　人種・民族問題と地域紛争

イ　「新現代社会」（清水書院）　「新政治･経済資料」（実教出版）

(2)　単元（題材）の指導目標

・　人種・民族問題と地域紛争に関する基礎的・基本的な知識や技能を習得させ、それらを活用して課題を探究させることにより、思考力・判断力・表現力を育成する。

・　人種・民族問題と地域紛争について具体的な課題を見いだし、解決を目指して自他の意見を調整し、合意形成を図る態度を育成する。

(3)　評価規準

	ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
単元の評価基準	民族問題と地域紛争に対する関心を高め、意欲的に課題を探究し、民族問題や地域紛争の望ましい解決方法を考えようとしている。	民族問題と地域紛争に関する課題を多面的・多角的に考察し、望ましい解決の在り方について公正に判断した過程や結果を適切に表現している。	民族問題と地域紛争に関する資料を活用し、また有用な情報を適切に選択して、自分の意見の発表などに効果的に活用している。	民族問題と地域紛争に関する歴史や現状、背景を理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）指導計画（２時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	・世界の人種・民族問題と地域紛争	・現在、民族問題と地域紛争にはどのようなものがあるのかを理解する。	ア、エ ・民族問題と地域紛争に対する関心が高まっている。＜観察＞ ・民族問題と地域紛争に関する歴史や現状、背景を理解している。 ＜ワークシート＞
2（本時）	・世界の人種・民族問題と地域紛争解決への合意形成	・民族問題と地域紛争を望ましい方向で解決するためにはどうすればよいかを考える。	イ、ウ ・民族問題の望ましい解決の在り方について公正に判断している。＜発表＞ ・民族問題と地域紛争に関する資料を活用し、自分の意見の発表などに効果的に活用している。 ＜発表＞＜観察＞

(5)　本時（全２時間中の２時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　世界の人種・民族問題と地域紛争について、望ましい解決の在り方を考察することを通して、人種・民族問題と地域紛争に関する基本的な見方や考え方を深めさせる。

(ｲ)　グループでの討議やロール・プレイングなどの言語活動を充実させ、多面的・多角的に

考察する能力や意見を調整する力を身に付けさせる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	2分	・リビアのニュースを題材に、正に今、地域紛争が起きていることから課題を見いだす。 ・リビアの新政権発足にも、民族問題、宗教問題などが絡んでいることを考察する。	・前回の授業までに、国際政治の特質や紛争の諸要因を学習していることを踏まえ、地域紛争が現在進行している世界的な課題だと気付かせるようにする。	イ 地域紛争、民族問題の現状について理解し、その知識を身に付けている。 ＜観察＞
展開	展開（1）8分	［討議］ ・事前に調査してきた担当テーマ（対立点）について班員で共通理解し、それぞれ解決方法を考える。 参考〈ワークシート１〉 「自分が担当するテーマ（対立点）」 「自分の役・立場で主張すること」 「自分の役・立場で共生・共存に向けてどんなことが提案できるか、又はできないか」 「自分の役・立場を越えて共生・共存に向けてどんなことが提案できるか、又はできないか」	・自分で担当するテーマ（対立点）については解決策もあらかじめ用意させた上で討議させる。 〈ワークシート１〉を参考に進めさせる。	イ、ウ 多様な資料を読み取り、解決策を多角的に分析している。自身の調査内容・解決方法を適切に表現している。 ＜観察＞
	展開（2）5分	［台本作成］（発表準備） ・［討議］の内容を踏まえ、国際会議等での議論を模した台本を作成する。 →〈ワークシート２（台本用原稿）〉 ロール・プレイング	・対立する二つの立場での意見を明確に発言させるようにする。 ・発表班以外の生徒も参加させ意見を述べさせるような台本を作成させる。 ・目的は合意形成にあることを明確にするようにする。	イ 調査内容、討議結果を台本に反映させるとともに、台本作成を通じて人種・民族問題・地域紛争の本質とその解決策を適切に表現している。 ＜観察＞
展開		・自分の担当する人種・民族問題について、自分の役を演じ対立点を明確にするとともに、解決策を提案するまでのプロセスを発表する。 ・他班の発表について理解を深め、課題について考察する。紛争当事者として考察する。 →〈ワークシート３〉	・発表班以外の生徒にも、発表班が問題提起を行い、中立国など様々な関係国としての役割を与えるなど、ロール・プレイングに参加する緊張感を与える工夫をさせる。	イ ロール・プレイングを通じて人種・民族問題の課題と解決策を考察し、判断した過程や結果を表現している。また、問題を自分のこととして捉えており、的確な質疑応答を行っている。 ＜ワークシート＞ ＜観察＞

展開（1）、展開（2）は前時までに行い、展開（3）にボリュームをもたせてもよい。

予想される台詞の例
「この国の指導者は、（　　）だとして宗教における我々少数派の考え方を弾圧している。共生などあり得ない。」（少数派Ａ）
「少数派の（　　）派は資源の独占を目的に分離独立を掲げている。国家共有の財産を簡単に手放すわけにはいかない。」（多数派Ｂ）　など

展開	展開（3）ロール・プレイング30分	「注目したいテーマ（対立点）」 「自分はこう思う！」 「発表を聞いて意見が変わった！」 [質疑応答] ・質疑応答で問題への理解を深める。 ・他班の生徒の意見を聞き、自分たちにはなかった視点があれば取り入れる。 活発な質疑応答や全体での討論を実現するためには、発表班以外の班も確実に内容を理解しておくことが前提となる。	・発表前に他班の人種・民族問題について、注目したいテーマと自分の考えを確認するように指示しておく。また、発表を聞いて自分の考えに変化があったかを確認させる。→〈ワークシート３〉 ・質疑応答については、発表班以外の生徒が参加できるよう、あらかじめ台本を工夫させる。クラス全体での討議になるように工夫させる。質疑応答をロール・プレイングに入れ込ませることも考えさせる。 ・ＨＲ全体の討論に展開できるように留意する。	ウ 調査の際集めた資料を取捨選択、活用して発表を行っている。また、配布資料に、自分たちの選択した民族紛争の問題点などについて適切に表現している。 ＜ワークシート＞ ＜観察＞
まとめ	5分	・どうしたらより良く平和裡に共生・共存ができるかを考察する。 →〈ワークシート３〉 「私の提案：この人種・民族問題、地域紛争には（　　）のような解決方法はどうだろうか。」	・他の班も含めて、注目したテーマについて考察させる。 →〈ワークシート３〉	イ これまでの学習を踏まえ、個別の問題に応じた解決方法を自分なりに提案している。＜ワークシート＞

(6)　本時の振り返り

ア　民族紛争などの背景を他の班に説明するために、寸劇を行ったり（たとえば背景を教室の一場面に置き換えて説明していた。）、「模擬国連」のようにあらかじめ台本化されたディベートを行ったりするなど、それぞれの班で創意工夫がなされていた。

イ　それぞれの班の中では、発表に至る過程で話合いが密に行われ、合意形成を図る態度が身に付きつつあった。

ウ　ＨＲ全体で議論し合意形成に至るには、どの班も民族紛争などの課題に関する知識・情報量を等しく共有することが最低条件であり、いかに共通理解を図りＨＲ全体で合意形成を図ることができるかについて工夫が求められる。

政治・経済ワークシート　人種・民族問題と地域紛争

「どうしたら平和的に共生・共存できるだろうか」

～高校生が解決方法を教えます～

1　議論に向けて

・3～5班編成で、各班一つの人種・民族問題を担当する。
・自分の役割に応じて自分の意見を構想しておく。
・他の班向けの説明資料を作成する。対立点や課題が分かるようにする。

2　授業の流れ

(1)　最終打合せ（発表班）
・作成した資料などを基に対立点や課題を明確にし、どうしたら平和的に共生・共存できるか解決方法を探った、これまでの話し合いの最終確認、まとめを行う。
他班テーマについての討議（見学班）
・発表する他班テーマについて、資料を基に討議する。

(2)　ワークシートの作成

(3)　ロール・プレイング（発表）
・担当した人種・民族問題についてのテーマ（対立する点：固有の文化、歴史、政治体制、宗教など）をいくつか挙げ、課題や解決方法までを台本に入れ込む。
・場面設定（国連安全保障理事会、第三国での非公式会議など）を行う。

(4)　質疑応答

3　ロール・プレイングの流れ（各班の発表例）　［台本］

		発言者	台詞	留意点
会議	15秒	司会者	「（　　）地域における（　　）の問題について議論を始めます。まず双方の言い分を聞かせてください。」	・中立の立場で演じる。
立論・反論	14分	出席者X（少数派A）	「この国の指導者は、（　　）だとして宗教における我々少数派の考え方を弾圧している。共生などありえない。」	・それぞれの立場で主張する。 ・一人複数回発言可。 ・中立案作成に向けての建設的な意見など必要なら入れる。 ・周りの班が理解できるようテーマや対立点を明確にする。 ・資料などに挙げられたテーマには触れる。
		出席者（多数派B）	「少数派の（　　）派は資源の独占を目的に分離独立を掲げている。国家共有の財産を簡単に手放すわけにはいかない。」	
		・ ・	・ ・	
まとめ	45秒	司会者	「この問題を解決するためには少数派（　　）の分離独立を認めざるをえません。なぜなら（　　）だからです。 国連19X番目の加盟国となるでしょう。	・結論は必ずしも「共生・共存」でなくてよい。「独立・対立」でもよい。 ・他の班（他の国・地域）からの質疑応答・意見をもらう。

4　議論に向けて考える。

担当する人種・民族問題と地域紛争	
班員	
担当する人種・民族問題と地域紛争における対立点は何か	
自分が担当するテーマ（対立点）	
自分の役・立場	
自分の役・立場で主張すること	
自分の役・立場で共生・共存に向けてどんなことが提案できるか。または提案できないか。	
自分の役・立場を超えて共生・共存に向けてどんなことが提案できるか。または提案できないか。	
他の班で注目したいテーマ（対立点）	

Ⅵ　研究の成果

各実践事例では、生徒から「他者と話し合うことで、自分の考えが深まった。」、「自分だけの問題だけではなく、社会全体で考えなければならない問題が数多くあることが分かった。」などといった感想が挙げられ、今後の学習に対して意欲が高まっている傾向が見られた。こうした生徒の授業評価や４本の実践事例の検証から、基礎的・基本的な知識・技能の習得の上に、それらを活用して、他者との合意形成に向けた話合いや、様々な意見の調整能力を育成するなどの合意形成を図る過程を授業の中で経験することで、生徒の思考力・判断力・表現力が養われ、「他者と共に生きる自分」への自覚をも深めさせることが実証できた。

1　「合意形成」を図る場面を授業に取り入れることで、生徒が自らの言葉で意思表示をし、積極的に授業に参加するようになり、そのことによって生徒の学習意欲が高まり、主体的な学びを可能にした。

(1)　基礎的・基本的な知識の確認を行う場面や、小グループでそれらを活用した課題について話し合わせる場面を設け、それを観察することによって、発言や発表が苦手な生徒も話合いに参加しやすくなり、またそれによって授業内容に関する発言が多く聞かれ、生徒が主体的に授業参加する態度へと変化が見られた。

(2)　実践事例Ⅰでは、地球温暖化に関して、環境の保全か、経済成長かという立場で世界各国の具体的な取組の内容を活用しながら、自他の考えを主張し合う様子を観察すると、「現代に生きる私たちの課題」として考えることができるようになったことが分かった。

2　基礎的・基本的な知識・技能の習得を踏まえ、身に付けた知識や技能を活用する場面を多く設けることで、「合意形成」を図る態度を身に付けさせることができた。

(1)　基礎的・基本的な知識、概念や理論及び倫理的な諸価値や先哲の考え方を学び活用することで、生徒が自らの立場や考え方に固執せず、広い視野から物事を見ることができるようになった。実践事例Ⅱでは、現代社会において必要な意思決定の手順や合理性について、先哲の思想を活用して考察することで、社会参画の態度を身に付けさせることができたことが、グループごとの話合いの様子やワークシートの内容から分かった。

(2)　既習事項を踏まえた話合いや発表を行わせることで、思い付きの意見ではなく根拠のある意見を述べさせる指導が充実し、指導の過程の中で、「確かな学力」を身に付けさせる授業が実現できた。例えば、実践事例Ⅲでは、裁判員制度について、グループの意見をまとめ、ＨＲで話し合い、発表・討論をしていく中で、法の意義について自分の意見の客観性や妥当性を確認し、明確な根拠から自分の意見を導き出すことの大切さやに気付くようになったことが、ワークシートの自己評価の記述内容から分かった。

(3)　実践事例Ⅳでは、国際社会における独立と共生という観点で、自らの考えをまとめさせるとともに、話合いの場面を設けたことで、人種・民族問題に興味・関心が高まったことが、話合いの様子を観察することで分かった。また、自らの考えと他者の考えを客観的に比較することで、自らの考えをより深めることができ、課題を多面的・多角的に考察することができるようになったことが、ワークシートの記述から分かった。さらに、グループ学習の様子から、言語活動の充実を図ることで、生徒が自分の言葉で他者と様々な課題についての合意形成を図る態度が身に付き、自らが社会の中で、他者と共に生きている存在

であることに気付かせることができたことが分かった。

Ⅶ　今後の課題

1　「合意形成」を図る態度を全ての生徒に育成する授業方法の研究及び開発

今年度の研究では、合意形成を図るために必要な力として、現代社会の諸課題について考察し提案していく力と、様々な提案を調整する力の二つを育むことを目指した。本研究が、現代社会に生起する様々な課題に対する関心を高め、課題を解決するために必要な方策を他の生徒と話し合いながら、社会的な事象に対する見方や考え方を成長させ、合意形成を図っていく契機となることは、各実践事例から見て取ることができる。

しかし、検証授業において、生徒の中には討議や発表などで、自己の意見を発表しようとせず、自己の意見を発表するよりも、グループ内の意見に迎合して、主体的に社会参画をしようとする態度がまだ十分に育まれていない場面が見られた。さらに、ＨＲの生徒全体で合意形成を図るための共通の知識基盤の定着が弱かったため、思考力が十分身に付いたかを確認することができなかった。

各実践事例に見られるように、現代社会における諸課題の解決には、全ての生徒が基礎的・基本的な知識や技能を活用しながら、話合いや発表の中で提起される多様な意見を調整し、課題解決への合意形成を目指して自ら提案を行う態度を身に付ける必要がある。しかし、発表や課題提示の方法、課題解決のための共通の知識基盤や判断の規準を明確に設定しないまま授業が進められてしまった点が反省される。基礎的・基本的な知識や技能の習得と、それらを活用して合意形成という活動を通して思考力等を育成することとを、学力向上という目的の下、どのように有機的に連関させることが最も望ましいのか、というねらいを明確にした授業内容と方法の更なる研究が求められている。

2　合意形成を図る態度や多様な意見を調整する力の評価についての研究及び開発

１で指摘したとおり、生徒が合意形成を図っていくために、基礎的・基本的な知識・技能を活用して考察していくことと、多様な意見の調整を図る中で、どのように生徒自身が変容したかについての評価は、グループでの話合いやワークシートへの記入に見られる発言や提案の内容等によることが必要である。しかし、「習得した知識や技能を活用して、合意形成のための考察、提案、調整」過程をどのような観点で評価するのか、合意形成への努力を続けたかどうかの評価をどのように行うかなど、授業者が客観的に確認する手だてについての工夫が足りないところが見られた。

このことについては、グループ討議や発表といった授業時間内で評価項目をより明確化したワークシートや振り返りシートなどの活用など、目に見える方法を工夫するとともに、生徒にレポートや小論文で自分の考えを授業の後に表現させる方法がある。これらの方法を学習場面に応じて組み合わせて活用することが、授業前後を含めた授業評価につながるのである。また、授業時間における声の大きさや積極性のみを評価するのではなく、授業で学んだことがその後の生徒の学習し続ける態度につながっていくかどうかを公正に評価することも大切である。このような反省を踏まえ、公民科各科目では、課題を探究する活動ごとに基礎・基本の概念を明確化するとともに、更にきめ細かく、公正な評価規準を設定し、小テストや定期考査、小論文などをどのように活用して評価していくかを模索する必要がある。

平成２３年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　公　民

学　校　名	課程	職名	氏名
東京都立浅草高等学校	定時制	主任教諭	◎　目﨑　昭年
千代田区立九段中等教育学校	全日制	主任教諭	○　小美野　清一
東京都立目黒高等学校	全日制	教　　諭	村岡　周子
東京都立杉並工業高等学校	全日制	教　　諭	吉田　史弘

◎　世話人　　○　副世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　大山　　敏
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
課務担当係長　沖山　栄一

平成 23 年度
教育研究員研究報告書

高等学校　公民

東京都教育委員会印刷物登録
平成２３年度第１８１号
平成２４年　３月

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８３６
印 刷 会 社　有限会社　シーダー企画